

平成26年度スーパーバイザー事業報告書

研究テーマ

「生徒の興味・関心や満足感を高めるための授業を工夫し、学力向上を目指す」

智頭町立智頭中学校

スーパーバイザー： 広島大学大学院 木下 博義 准教授

1. はじめに

本校は鳥取県東部に位置し、生徒数161名の小規模校である。今年度末には新校舎が完成する。近くには小学校があり、町内に小学校1校、中学校1校で、小中連携も活発に行っている。生徒の実態は、明るく、誰に対しても気さくに話しかけることができ、班活動に活発に取り組むことができるという良さがある。しかし、学習にねばり強く取り組む力が弱いと学力を十分に伸ばし切れていない生徒が少なくない。

昨年度までの2年間、「少人数学級を活かす学びと指導の創造事業」を行い、授業改善に取り組んできた。その成果として、生徒アンケート結果から「話し合う機会が増えた」「言語活動の力がついたと感じる」の項目で肯定的な回答が増えた。しかし、「興味・関心のわく授業であるかどうか」を問う項目では肯定的な回答が少なかった。そこで本年度は、生徒が授業への満足感を得ることができ、学習への興味・関心を高められる授業づくりを目指し、学力の向上につなげたいと考え、本研究テーマを設定した。また、授業研究の一手段としてアクションリサーチの手法を取り入れ、授業改善に取り組むこととした。

2. 研究のねらい

- ・アクションリサーチの実践を通して、授業を改善し、生徒の満足感を高める。

3. 研究の方法

- ・アクションリサーチを共通実践し、授業改善の手法を共有する。
- ・授業改善の視点を絞り、視点ごとに部会を設け授業づくりの検討を行う。
(めあての明確化・言語活動のしかけ・ふり返りの充実)
- ・継続的に小中連携を行い、授業改善に役立てる。

4. 実践内容

(1) アクションリサーチの研修会(6月11日)

指導助言 広島大学大学院教育学研究科 准教授 木下 博義 氏



① アクションリサーチについての講義

- ・一人ひとりの工夫の授業実践「授業を大きく変えるのではなく、少しだけ変える」
- ・日々の授業づくりでPDCAサイクルを実践し、自主的に授業改善を進める手法。

アクション・リサーチ

所属(智頭町立智頭中学校)氏名(講師氏生)

対象・単元	学年・組 第2学年1・2組 生徒 55名 単元名 回路を流れる電流はどこも同じか		
テーマ	「生徒の苦手意識を払拭したい」 課題：活動・理解・定着の流れを50分間に凝縮して		
問題 (生徒の実態)	電流は目に見えない現象であるため、イメージできる生徒とそうでない生徒によって学習意欲に顕著な差が見られる。この状態で実験を行っても得意な生徒だけで実験が進められ格差は広がる一方で、苦手な生徒は結果や考察を書き写すだけで理解に深まりがなく、定着も薄くなってしまふ。		
リサーチ・クエスチョン	どのように授業を展開すれば苦手な生徒と得意な生徒が有機的に協力し合って実験が進められ、苦手な生徒の意欲の向上や理解の深まり、知識の定着が図れるだろうか。		
仮説	検証方法	実践	検証結果
① 否定なしに回答を組み立てなければならない場面を設定し、仲間から協力的な助言が得られるようになれば、うまくいった経験によって自信が持て、苦手意識を払拭できるのではない。 ② 50分間に実験一考察一まとめ一問題演習をプログラムがよく入れることで、苦手意識のある生徒でも知識の定着や理解の深まりが得られるのではない。	① 実験中の生徒の様子を観察し、振り返り用紙のコメントを分析する。 ② 確かな問題に取り組んでいる様子を観察し、振り返り用紙のコメントを分析する。	①・担当者を各班で決めた実験を実施。 ・やり方を観ている班に他の班員が気付き助言するよう指示。 ・振り返り用紙で自分の取り組みを記述。 ②・水流モデルで理解させた直後に練習問題を実施。 ・振り返り用紙で自分の理解度をA B C評価。	① 多くの班で協力的に実験が進んでいた。担当者を動かしたことで、回数を観ている中心になる生徒が明確になり、よい声援が見られた。担当者に任せきりになり、振り返り用紙に記入がなかった班も見られた。 ② 2回はテンポよく進み、最後の問題演習は効果的であった。ただ、回路の組み立てにまだ感覚的な生徒がいることが振り返り用紙から得られた。そういった生徒も、翌日別班の電流の規則性には納得していると思われる。
成果 (授業実践後、1週間後)	理科では、実験のデータを、時間をまたいで考察に進めるパターンでの授業が行われることがあるが、実験の結果が鮮明なうち(つまり時間内)に考察し、まとめ、問題演習で定着させることは、学力の定着において大変効果的だと感じた。また、回路を実際に取り組み立ててみることで、苦手意識が取り除かれていることも事後の振り返りから得られた。		
課題 (振り返り用紙から得られた気づき)	この時間には回路の組み立ての訓練を経て臨んだが、電流計のつなぎ方や極の読み取り方がまだ未熟で、良いデータが得られず、考察に支障が出ることがあった。班のチームで取組まうことができれば、失敗も減り、技能も高まると思うのだが、それがうまくいかなかった。班の5名がもっと有機的に関わりあって実験を進める手立てを考へる必要がある。		

② アクションリサーチの提案授業

- ・実践経験者によるアクションリサーチの手法を取り入れた授業公開

(2) 校内授業研究会

① 6月11日

授業者 荻原 俊行 (理科)

- ・授業改善の視点「どの生徒にとっても、より楽しく、より理解をしやすくするにはどうすればよいのだろうか。」

② 10月24日

授業者 土海真由美 (国語)

- ・授業改善の視点「苦手な生徒のための支援を、グループ活動を使い、どう行うか。」

授業者 加藤 順子 (英語)

- ・授業改善の視点「どのような指導をすれば、授業に全員が参加でき、学習意欲の向上が認められるか。」

(3) 小中合同授業研究会

① 小中合同授業研究会事前協議 (10月7日)

- ・小中合同で、国語科と英語科に分かれ学習指導案を検討し、授業改善の視点に基づき意見を出し合う。

② 小中合同授業研究会 (10月24日)

- ・事前協議を経て検討された授業を参観し、共通の視点で評価し、自分の授業に役立てる。



(4) 授業公開週間の実施 (年3回)

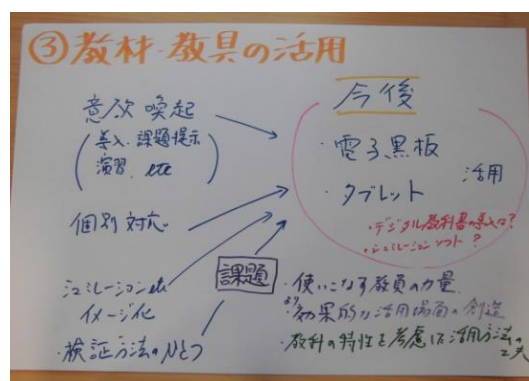
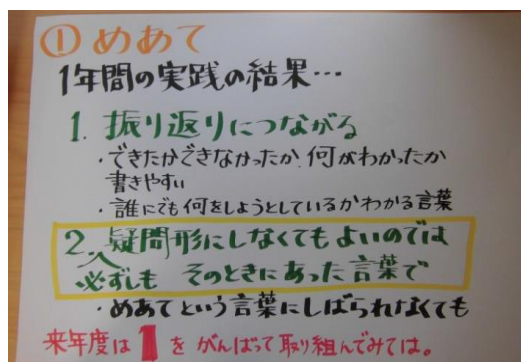
① 7月(5名) ② 10月(5名) ③ 1月(5名)

- ・アクションリサーチの手法に沿って計画した授業を全教員が公開し、ミニ研究会を開く。

(5) 校内研究のまとめ (2月2日)

- ・アクションリサーチの実践を振り返り、効果の確認とよりよい実践方法について意見を交換する。

- ・授業改善の視点について、部会ごとに成果と課題を話し合う。



5. 研究のまとめ

(1) 成果

- ・アクションリサーチの手法を導入したことにより、授業者の課題に即した授業実践の研究が深まった。
- ・授業改善の視点を意識して授業を組み立てる機会が増えた。
- ・小中の垣根を越えた授業づくりの可能性が広がった。

(2) 課題

本年度の生徒アンケートでは、「興味・関心のわく授業であるかどうか」の項目で肯定的な回答は低く、期待された改善は見られなかった。しかし、個別の学習では、事後アンケートや振り返り用紙に「分かった」「できた」と回答する生徒が多く、授業改善の手応えを感じている。今後も、全職員が共通認識のもと授業改善に取り組むことで、生徒の学習意欲や満足感が少しずつ高まり、ねばり強く学ぶ姿勢がつけられていくものと考えている。